といひ、覺運は『念佛寶號』（『大日本佛教全書』天台小部集釋三四二）に

極樂化主彌陀佛　壽命光明無數量
彼佛利益無際限　引接念佛諸衆生
壽命無量彌陀佛　我今至心歸命禮
自他法界諸衆生　同共往生極樂界
法華經中最秘密　久遠實成大覺尊
三惑頓盡遍一切　無師獨悟無始終
始成正各釋迦尊　積劫修道成正覺
爲化往緣諸衆生　伽耶始成非實佛
准例極樂彌陀佛　亦是垂迹應非實
是故實成彌陀佛　永異諸經之所說
我今依止歸命禮　自他同證本佛果

といへり。元照は支那の律師にして彌陀念佛に心を寄せし人、覺運は日本天台慈慧僧正の資なり、此等の人は彌陀佛をも釋迦佛と同視して應迹の佛とし、元照の如

きは十劫成道を以て釋迦佛一期說法の機に赴投するの言にして實義にあらずとするなり。故に元照は

又言、成佛以來、於今十劫者、爲遣疑情、有人疑云、壽雖無量、要有始終、未知今者爲始、今解云、今既所述唯選十劫、當知今後無量劫住、

といふ。淨土門の諸哲の說は是と同じからず、鎭西流聖冏の『決疑鈔直牒』、恢嶺の『選擇集纂註』に十劫に六說を擧ぐ、一に常演の十劫、是鎭西名越流の學者の說にして十を滿數とし三世の諸佛皆十劫と說といふ。二に赴機の十劫、是は釋迦佛施設の言とする鎭西蓮華堂流のいふところ、三に延促劫智の十劫、是は佛智自在力に約す『法華玄義』七下（縮藏呂九六十四丁）に

佛有延促劫智、能演七日爲無量劫義云云、

といふが如し。四に但の十劫、是を鎭西の正義とす、十一劫にもあらす九劫にもあらず、釋迦佛成道以前實に十劫を歷たりといふ。五に本門の十劫、六に迹門の十劫、此二は幸西義より來る說にして鎭西の斥する說なり。眞宗にては聖人『淨土和讚』に曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』（初丁）に

成佛已來歷十刼　壽命方將無有量
法身光輪遍法界　照世盲冥故頂禮

といへるを承けて、

彌陀成佛のこのかたは　いまに十刼をへたまへり
法身の光輪きはもなく　世の盲冥をてらすなり

といひ、後に至りて『法華經』の深意を顯して、

彌陀成佛のこのかたは　いまに十刼とときたれと
塵點久遠刼よりも　ひさしき佛とみへたまふ

といひ、又

久遠實成阿彌陀佛　五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟尼佛としめしてぞ　迦耶城には應現する

といひ、又『楞嚴經』の十二如來十二刼成佛の說によりて往昔恒河沙刼の彌陀成道をのべ、

十二の如來あひつぎて　十二刼をへたまへり

最後の如來をなづけてぞ　超日月光とまふしける

といへり、聖人の意迹門・本門の彌陀佛成道を是認せるや、又彌陀久遠の成佛を是認し十刼成道を方便施設の佛說とするや、又久遠十刼不二の義をとるや測知しがたし。古來聖人の眞意の在る所を知らんとて種々の解釋を試みるもの多し。覺如上人は『口傳鈔』の三身開出草に荆溪の『止觀輔行』と、覺運の『念佛寶號』と善導大師の『法事讚』と、『楞加經』と『般舟經』との五證を擧げて彌陀佛の本師法王久遠の正覺たることを述べ、

久遠實成の彌陀のたちとより、法藏正覺の淨土敎のおこるをはじめとして衆生濟度の方軌とさただめてこの淨土の機とゝのほらさるほと、しばらく在世の根機に對して方便の敎として五時の敎をときたまへり、

といひ、『願々鈔』にも報身報土の永無生滅の義をのぶ。存覺上人は『破邪顯正鈔』・『顯名鈔』・『眞要鈔』・『持名鈔』・『決智鈔』に理事不二の義を以て彌陀正覺の覺體の久遠實成なるをのべ、慈悲攝生の故を以て十刼成道の方便を示すことをいへり、『顯名鈔』に

阿彌陀如來は久遠實成の覺體、無始本有の極理なり、

といふは事理不二の理をあげ、『眞要鈔』に

十劫已來の成道をとなへたまひしは果後の方便なり

といふは衆生攝化の善巧方便なることを述ぶ、十劫成道を權假施設とするにはあらず、實成と方便は、實智權智といふが如し。聖人の敎義によれば十劫の成道も報身ならざるべからず、久遠を修因感果の佛とすれば、是亦報身といふべし、報身より應身を示現するは理塞がる所なきも、報身より報身を示現するといふことは理成せず、故に眞宗古來の學者種々の解釋をなす。之を大別すれば三說となる、一に數々成佛の赴機說、是は空華學轍のいふ所にして、赴機といへる古說を脫體換骨して、彌陀佛の大悲衆生の機に赴きて、數々因に降り數々果に登る、其實は無始の成佛なり、又十劫といふは但の十劫にして實數なり、故に鎭西六義の中には赴機にして但の十劫なり、赴機の當相より十劫己前を回類すれば、方便法身を全ふしたる法性法身、之を久遠といひ、赴機の當相は法性法身を全ふしたる方便法身、之を十劫成道といふ、其實は前際後際二身相卽すといふ。二に無師獨悟說、是は寶雲一派の唱ふ學說

なり、通途圓頓家の說に法體門、隨緣門といふことあり、法體門よりいへば、悟理の智見よりいふが故に衆生も佛も不增不減なり、諸法平等を照すが故に若隨緣門よりいへば、既に前後あり不知何の佛か、先成佛する佛之を說きたまはざれば我等も亦知るべからず、其說くと說かざるとは四悉檀によるなり、然るに最初の一佛は眞如內薰によりて無師獨悟す、第二佛より以來は最初の一佛の敎化によるが故に之を最初一佛內薰自悟といふといへり、此通途說に準據し最初の一佛を久遠の彌陀とし、二佛以下三世十方の諸佛此一佛によりて成佛す、故に三世諸佛依念彌陀三昧成等正覺といふ、此彌陀佛を衆生の機に投じ、趣入の邊より滿數に約して十劫成道と說く、所謂常演の十劫、番々出世の諸佛皆然りといふ。三に開迹顯本說、此義によれば彌陀佛は實に釋迦佛出世より、十劫以前に成道したまへること『大經』『小經』の說のごとし、眞如海中より垂名示形して我等を救濟すべく、利他の大願業力の波瀾を起し正覺を成じ、衆生往生の門戶を定めたまひしは實に十劫なり、されども其正覺の體よりいへば前後古今を超絕す、超絕するが故に十劫卽久遠にして十劫久遠無差別なり、是を以て覺體を開顯して久遠の彌陀といひ、之を三世諸佛所念の體

とす、二身相卽の故に十刼正覺の當體無始無終の久遠法身なり、無始無終の覺體より有始無終の用を示す、用は利他にして體は自利、故に體を實成といひ用を方便といふ、方便は智を全ふせる慈悲の運用なり、又體は是本にして用は是迹、故に久遠實成を開迹顯本といふ、應身を開ひて報身を顯すといふにはあらず、十刼成道は報身にして應身にあらず、報身は有始無終にして隱沒なし、豈しば〳〵因に轉じ果を現ずることあるべけん。以上三說の中第三說最穩當なるを覺ふ。思ふに指方立相、久遠十刼、本師法王、佛性法性などの說は、すべて迷悟兩方面より觀察し、不二而二の妙諦を體得して解釋すべきものとす。

第十一編　眞宗教義と人生

第一章　厭離穢土欣求淨土

親鸞聖人は『敎行信證』『文類聚鈔』『愚禿鈔』『和讃』等の諸書に屢々厭欣の敎義を述べて、彌陀佛救濟の手にすがるべきことを勸說せり、唯聖人のみならず、淨土敎相承の七高僧の說にも之を皷吹せらるゝこと最も多きを見る。厭離穢土といふは汚穢なる世相を厭忌し遠離することにして、忻求淨土とは淸淨無垢なる境界を忻慕し要期するをいふ。世人の多くは此敎義を聞き、其指す所の汚穢なる世相とは此人生をいひ、淸淨無垢なる境界とは西方十萬億土を過し、彼方の極樂を憧憬するゝをいふことゝし、厭忻の敎義は人生を悲觀し、之を厭忌してひたすら死後の世界を慕ふものなれば、日進月步の社會發展の運行に妨害となるものなりと思ひ非難するやうなれども、是はよく考ふべきことゝ思ふ。我邦中古以來の歷史には此厭忻敎義を全く人生を無視し、死後の世界を理想とすることゝ心得、山林に入りて人世を遁れ、只管に念佛して死後の安樂世界をあこがれし行者頗る多し、是は聖道門

的氣分の未だ全脫せざる願生淨土の行人といふべし。人事の單純なる時代、戰亂の打續きたる世などにはかゝる行爲の社會人心に投合せしこともあらん。されども往生淨土の敎義、他力念佛の面目は、聖道門的氣分を全脫して人生に處して世事を營み、凡夫そのまゝ佛道を步む處に顯現す、故に捨家棄欲とか、出家發心とか遁世とか、世捨人とかいふ言語の、一時世の中に行はれしは、すべて聖道門的佛道修行の樣式の佛敎界に重要視せられ、淨土門他力念佛の行者までも此範疇を脫し得ざりし時代の趨勢なり。聖人はかゝる趨勢に囚はれて他力念佛の行者まで自己の凡夫性を隱蔽し、聖道門的樣式を表せんとして、つゐに僞善者の群に入り、佛を欺き人を欺き自己を欺くに至るを見聞し、悲嘆やる方なく彌陀佛本願の眞意義を露堂々に發揮し、凡夫の自性を赤裸裸に說破し、自己に之を實行して淨土門純粹他力の眞宗を宣傳せり。故に厭離穢土、忻求淨土の敎條も、淨土門內の聖者ぶりたる人の執る所と異りて、凡夫性の上に之を發揮することを務められたり、聖人の性信房に與へし消息に（眞宗法要第四卷五丁）

往生一定とおほしめさんひとは佛の御恩をおほしめさんに御報恩のために御念佛こころにいれてまふして世の中安穩なれ佛法ひろまれとおほしめすべし、

といへり、聖人の敎義は非國家的にあらず、非社會的にあらず、聖者的にあらず、國家社會に處して、人間性のそのまゝに彌陀佛願力に安住して、報恩道を步めと敎ゆるなり。是に於て厭離穢土、欣求淨土の樣式もおのづから轉化して汚濁惡魔の如き世相を厭離して、淸淨無垢の佛境界を理想鄕とし、願力不可思議に乘托し報恩の念を相續し、世道を進步し向上し行くを聖人敎義の厭離穢土、欣求淨土とす。聖道門といへども小乘敎及大乘權敎と異れる實大乘の天台、眞言、禪、華嚴などの敎義は煩惱卽菩提、生死卽涅槃といひ、生死を出でゝ生死に遊び、娑婆卽寂光の境に達するを敎義の主旨とす。故に天臺大師は

凡夫擔而不捨、二乘捨而不擔、菩薩捨而能擔、

といへり。然れども聖者的敎義は菩薩に至らずば、捨てゝよく擔ふといふ煩惱卽菩提の實現をなすことあたはず、凡夫にしてよく捨てゝよく擔ふことを得るは他力念佛の行者なり、捨るは是厭離穢土にして擔ふは他力信力の妙用忻求淨土なり。眼を轉じて人生のありさまを見れば、其きたなき穢れたること言語道斷なり、隆車

に駕し意氣揚々として大道を馳せ廻る貴人紳士は、其心術其行爲果して淸淨無垢の忻慕すべき境なるか、將又厭離すべき汚穢の世相なるか、靑樓高き處、翠帳紅閨美人の膝を枕とし、春夢に醉ふ人達の境界は欽羨すべき樂土なるか、歡樂極まりて哀情多し、喜見城の快樂も忽變して修羅となり、餓鬼となり、地獄となり、肉の快樂を恣にすし結果は、精神の大苦痛となり、精神煩悶の果は肉體の疾病となる、因果輪轉五里霧中に彷徨す、此等決して忻慕すべきものにあらず、實に厭離すべき世相といふべし。故に聖人の敎意によればかゝる世相を厭離して彌陀佛の境界を理想とし、人生を淨化して報恩道を進歩する之を厭離穢土、忻求淨土といふ、往生淨土を理想とし、大慈悲の救濟を得て生死一貫の精神の安定に住し、雀然紛然たる人生に處して煩惱に囚れず、よく煩惱を處理して報恩の思想を喚起す。故に悲哀苦痛も變じて安慰となり歡喜となる。聖人は『和讃』に

慈光はるかにかふらしめ　ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ　大安慰を歸命せよ

といひ、蓮如上人は

佛法にはよろづかなしきにもかなはぬにつけても後生のたすかるべきことを思へば喜び多きは佛恩なり（『御一代聞書』末二百九十八章）

萬事につきてよきことを思ひつくるは御恩なり、惡きことだに思ひ捨たるは御恩なりすつるも取るもいづれも〳〵御恩なり（同末二百九十六章）

たとひあきなひをするとも佛法の御用と心得ふべきと仰せられ候（同末二百六十章）

といへり。信仰に生活するものゝ眼に映じたる世相は報恩生活の舞臺なり、法味愛樂の實驗場なり、慈光照曜の靈境なり、故に穢土を厭離するといふ。蓮如上人は

自然の淨土にいたるなり、ながく生死をへだてけるさて〳〵あらおもしろやおもしろや（『聞書』末二十二章）

といへること、『御一代聞書』に見ゆ。聖人の敎義は悲哀沈痛消極的向下的の信仰を勸めるにあらず、歡喜踊躍の法味を相續するなり、捨てゝ擔ふの大乘敎理の凡夫に實現するの妙敎なり、道綽禪師は信心不退の行者の世に處するありさまを譬へて、

如鷺鴨入水水不能濕、

といひ、無信心者の煩惱の爲に身を誤るを譬へて、

如似逼雞入水豈能不濕、

といへり。同じやうなる鳥類にても鷺鴨は水鳥にて脚に水かきを有し居れば、自由自在に水中を游泳して溺るゝことなく、雞は游泳すべき水かきを有せざれば游水の術を知らず、水に入れば忽ち溺る、人生を池、又河に譬へていへば、金銀・酒色・名譽・權勢などの風波に打たれ、自ら生命を捨て、又他人の生命を奪ふなどの人は、雞同然の人にして、信仰の水かきをもたぬものなり、汚濁極まる人生を光明化し、よく自由自在に游泳し得るは厭忻の信心を有せるが一めなり、故に水鳥の水中に逍遙游するに譬ふ知るべし。厭離穢土・欣求淨土を解して、人生を悲觀して山林に遁るゝことゝ思ふが如きは、聖人の教義眞宗の實義にあらず。

第二章　王法爲本仁義爲先

眞宗の王法爲本仁義爲先の教旨のよく國家社會の情狀に投合して、數百年來偉大の感化功績を顯せしことは、皆人のよく知る所なり。此標語は蓮如上人が、親鸞聖人の世の中安穩なれ佛法ひろまれかしと心がけて、念佛相續せよと門徒に諭されし意を承け、之を布演して眞宗教義と國家社會とを結びつくべく宣傳せられしものなり、王法といふ語は源に溯れば『大經』に譬如王法、又は現有王法、或は王法禁令などと說けり、王者所定の法則にて治國安民の法度、今日にていへば欽定憲法といふが如し、佛陀の教法と相對して佛法王法といふ、所謂世間道と出世間道なり、傳教の『末法燈明記』には眞諦俗諦といへる佛教の專門語と組合せて、

夫範衞「如以流化者法王、光宅四海以乘風者仁王、然則仁王法王互顯而開物、眞諦俗諦遞因而弘教、所以玄籍盈字內、嘉猷溢天下也、

といへり。元來眞俗二諦といふ標語は、佛教各宗の通說にして『義林章』に各立四重の二諦を叙するが如き『廣弘明集』卷二十四に梁の昭明太子と慧超・慧琰・曇宗等の諸師との二諦に關する問答を載するが如き、此二諦に就て淺深重々の義說あり、『燈明記』の佛法王法を眞俗二諦と名けし如きは、至極卑近に說きあらはせし一種の義說なり、高尙に說明せしは道綽禪師の『安樂集』の如き是なり、平等眞

如法性の理體を眞諦といひ、此眞如の因緣を追ふて顯はるゝ差別轉變の相を俗諦といふ、此理を卑近に說て不可變の佛道卽出世間の法を眞諦といひ、隨時隨宜の變遷を見る政治・法律・道德・倫理の王法を俗諦と名く。されども聖人の敎義は、彌陀佛に向へる道と國家社會に臨める道とを以て組織せられしにはあらず、『敎行信證』一部六卷の敎書は、徹頭徹尾彌陀佛に向ひ淨土に向ふ眞假の道を峻別し、眞實の信心を得て報佛恩の經營をなさしめんと欲する所の意を披瀝せんとするにあり、『燈明記』を引證する意は、之を以て時漸く降り人漸く劣惡となるに隨ひ、聖者的に行儀の光を喪ひ、凡夫的行儀をそのまゝ佛道を步む他力敎義の面目をあらはさんが爲なり、化卷の『燈明記』引證の一節より化卷末に至る一段の所明、眞宗の行儀に開遮の二門ありて、聖道門にてかたく鎭せる肉食妻帶度世家業の人間的門戶を開放して、彌陀佛の本願を信受し報恩の道を步まんには、出家發心棄家棄欲を標榜せず、智愚凡聖男女老若を問はざる事を示し、又聖道門各宗に開放せる禁厭祈禱・卜占祭祀等の門戶を鎭して交通を遮斷せられたり。聖人敎義の面目は世道に順應し社會の進步を妨げず、人心の底に强き力を與へて、以て彌陀佛の恩寵に酬ひ世道と

相資相成せしむるにあり。存覺上人の『破邪顯正鈔』に（法要十三卷三十九丁）

佛法王法は一雙の法なり、とりのふたつのつばさのごとくくるまのふたつの輪のごとし、ひとつもかけては不可なり、かるがゆへに佛法を以て王法をまもり、王法を以て佛法をあがむ、これによりて上代といひ、當時といひ、國土をおさめましまする明主、みな佛法紹隆の御願を專らにせられ、聖道といひ、淨土といひ、佛敎を學する諸僧がたしけなくも天下安穩の祈請をいたしたてまつる、

といへり。佛法・王法卽眞俗二諦の相資相成といふことは佛敎各宗の通義にして、眞言宗の敎王護國も卽事而眞の實現なるべく、天台宗の鎭護國家、日蓮宗の立正安國・禪宗の興禪護國も、すべてみな眞諦佛法と俗諦王法との相資相成を標榜せざるはなし。然るに聖人の敎義は二諦二法の相資は各宗と同一なれども、其相資の義趣に於ておのづから一種特別の異彩を放てり、聖道諸宗の敎義はすべて依心起行斷惑證理を以て本旨とするものにして、夫婦の愛・親子の情國家社會のありさまは、皆有漏隨增のすがたなるが故に、苟くも聖道を蹈み菩提に到らんと欲せば、勢必ず之を遠離して還滅門の工夫をめぐらさゝるを得ず、故に世を捨て塵を厭ひ、山林閑

靜の處樹下石上に眞如の月影を見屆るを目的とする聖者的佛法は、元來王法と握手し聯歩すべきものにあらず、是に於て各宗とも調機開導結緣方便の道を以て佛法と王法とを結び付んと謀り、凡夫の情に投ずるに、佛敎中に說ける所の枝末の哢引法たる加持・祈禱・卜占・咒咀の功德を宣傳す、故に鎭護國家の趣旨も佛法の本旨よりいへば、畢竟方便道なるのみ。然るに方便却て佛敎の本旨の如く世に歡迎せられ、祈禱の外に佛敎なきが如きありさまに推し移り、私慾野心の爲に佛菩薩を祈り、迷妄狂痴到らざるなく、姦僧之に乘じて世を欺き人を弄び、佛日光暉を沒せんとするに當りて、聖人は深慨措くあたはず、人生と佛道とを調和せしめ、佛道の本旨を明にし、如來の恩寵を喜び、國家社會と相待ちて正道を履行せんと迷信邪見の門戸を閉遮し、眞宗を宣傳せられしなり、於是佛敎の本旨、國家社會に順應して眞正の二法二諦の相資となる。故に又『破邪顯正鈔』(上三丁)には

おほよそ當流の勸化にをいてはあながちに捨家棄欲のすがたを標せず、出家發心の儀をことゝせざるあひだ、農業をつとむるものはつとめながらこれを行し官仕をいたすものはいたしながらこれを信ず、しかればつとむべき所役をおこたらず、かぎりある公務をいるかせにすることなし、くにゝおいてわづらひなくところにをいてついえなし、中略佛法につけ世間につけてさらにあやまつところなし、

といひ、蓮如上人は之を承けて『御文章』第一帖第二通に、

當流親鸞聖人の一義はあながちに出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、たゞ一念歸命の他力の信心を決定せしむるときは更に男女老少をえらばざるものなり、

といひ、其外

ことに外には王法を以て表とし、內心には他力の信心をたくはへて、世間の仁義を以て本とすべし、

外には仁義禮智信を守りて王法を以てさきとし、內心にはふかく本願他力の信心を本とすべきよし、ねんごろにおほせをかれたり、

まづ王法を以て本とし、仁義をさきとし、世間通途の儀に順して、

そのうえには王法をさきとし、仁義を本とすべし、

といへるの類枚擧に遑あらず。蓮如上人は眞宗の敎義と國家社會との交際を明にし、聖道各宗と異れる特色ある二法二諦の相資を、徹底的に宣揚すべく力說されし趣あり、故に王法爲本といふ標語は、蓮如上人より始まる。尤も當時は今日の如く、皇室と政府と國家と社會と家庭と個人と民衆黨伐などを細に區別し、道德・倫理を組織的に論ずるやうなことはなかりき。王法爲本は國家主義、仁義爲先は社會の道などゝわくれば、わけられぬこともなきやうなれども、當時の考にては國家も社會も家庭も個人も、すべて人生に關する敎訓は王者の號令するものとして、之を佛陀の敎を佛法とするに對して、王法といひしものならん、故に王法といふ語の意味は當時にありては、世道又人道とでもいふ如きものなるへし、今日の世態とは大に其趣を殊にす、今日にていへば王法は國憲國法にして、仁義は社會の狀態といふべし。然れば聖道諸宗の如きは王法に順應せんとすれば、其勢自宗の斷惑證理の本道を離れて枝葉方便の卜占・祭祀・禁厭・祈禱の術を以て國家社會の交際を保ち、聖人の敎義は佛敎の本意にもかなひ、亦よく王法に順應し相資け相成す、之を二法二諦の相資關係とする。

第三章　眞宗敎義と婦人

總して釋迦佛說の諸經菩薩の論等に男女觀に二種ありて、一は順世間肉體的男女觀と、一は佛敎敎理より觀たる男女說となり。後の男女觀に亦二種ありて、一は精神的男女觀にして、一は純理的男女觀なり。先づ初に諸經論に最も多く說ける順世間肉體的男女觀は、釋迦佛出世の當時社會に於る男尊女卑の風習に隨ひたる觀察にして、當時は女は男にまさりて罪深く障重く嫉妬・嬌靡・愚痴・忿恚等の下劣の情の多きものにして、男子は膂力・智慧等すべて優等なるものとし、女は男の爲に世に存するが如く考へ、物質同樣に男子の爲に使用せられ居たりし、此風習は次第に善化せしといへども、印度支那我國に通じて近古に至るまで行はれたりき。眞宗の敎義に於ても存覺上人・蓮如上人などの、敎義の宣傳には、之によりて佛陀の慈悲を說けるもの多し、先釋迦佛の經說に就ていへば『法華經』提婆品に（續藏一ノ三十三丁）

女人身猶有五礙、一者不得作梵天王二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身、云何女身速得成佛

と說けり、『超日明三昧經』には之を五礙といへり、梵王は淨行なり、帝釋は少欲なり、魔王は堅固なり、輪王は大仁なり、佛は萬德を具す、女人は染多く欲多く懦弱なり妬害あり、煩惱具足して皆上に反す、故に五障と名くと古註にいへり、又『超日明三昧經』卷下には五礙と一聯に三隔を說く（續藏宙二ノ五十五丁）

何謂三、少制父母出嫁制夫不得自由長大難子是謂三、

といひ、其外『法句譬喩經』『賢愚經』『玉耶經』『四十華嚴經』等、又『大智度論』に類文あり、世典にては『禮記』に

婦人從人者也、幼從父母嫁從夫、夫死從子、

といひ、孔子家語にも類文あり、此等の敎語は皆昔時は男尊女卑の風習の世に行はれ、婦人には獨立生活の自由なく一生苦樂すべて人によりて左右せらるゝものとせり、掠奪結婚さへ行はれし古昔を思へばさもありしならん。存覺上人の『女人往生聞書』に『涅槃經』『心地觀經』『優塡王經』『寶積經』『阿含經』『唯識論』『智度論』等を連引して、女人の罪深く障重きことを極論し、內に五障、外に三從ありといひ、蓮如上人は『御文章』五帖目第七通に

夫女人の身は五障三從とて、おとこにまさりてかゝるふかきつみのあるなり、

といへる皆上に列擧する諸經論を承けていふ所の女人觀にして、古昔の世態に順應せる肉體的男女觀なり。次に佛敎々理より觀たる精神的男女觀とは是亦釋迦佛の經說に見ゆ、『涅槃經』如來性品に、（盆五ノ四十九丁）

是大經典、有丈夫相、所謂佛性、若人不知是佛性者、則無男相、所以者何、不能自知有佛性故、若有不能知佛性者、我說是等名爲女人、若能自知有佛性者、我說是人爲丈夫相、若有女人能知自身定有佛性當知是等卽爲男子、

といへり。是肉體の如何にかゝわらず、精神より男女を判せしなり、自身に佛性あることを覺知したるものは、世間には其肉體より名づけて女人といふとも、釋迦佛の眼中には男子なり丈夫なりと稱し、もし又自身に佛性あることを覺知せざるものは世間には男子と稱するも、それは肉體よりいへる皮相外觀の男子にして、精神的に批判すれば女人なりといふ經說なり。此內面的知性の有無を以て男女を區別せしは、世間に所謂男勝女劣の肉體的名稱を轉じて、之を精神的批判の名として佛敎の敎理を述べて、釋迦佛當時にありては世の迷夢を破る曉鐘とせられしなり。

『法華經』に五障を說くの文に次で、龍女成佛の事を說くも、亦佛敎の敎理は精神的區別の名にして、未必しも肉體に拘泥すべからざるを示す意あるべし、淨土門の敎義は事相差別を本位とするが故に無相純理の方面を說かず、專ら順世間肉體的男女觀に約して本爲凡夫の敎意を明し、兼ては精神的男女觀の意を示せり。然るに五障三從等の說は、女人の自由を奪へる當時の世態に順せる肉體的男女觀なりと雖、たとひ男女同權の世態に推移するとも、天然の果報男女兩性の間には差別なきこと能はず、故に精神的男女說も知性を男とし、不知性を女とするは、男性的を女性的よりも勝るゝものとせるなり。方今世態一變して女人の地位權利の、男子と同等となるは智識才能の進步せるによれば、亦是精神的にいへる女丈夫の多きを加へしものといふべし、『大經』第十八願の外に特に三十五願に於て變成男子の願を誓ひたまへる佛意も、天然區別ある男女兩性を他力信心の力によりて、精神的に進化せしめんとの慈誨なるべし。聖人は『大經』の意を承て『和讃』に

彌陀の大悲ふかければ　佛智の不思議をあらはして
變成男子の願をたて　女人成佛ちかひたり

彌陀の名願によらざれば　百千萬刧すくれども
いつつのさはりはなれねは　女身をいかでか轉ずべき

といへり。是は善導大師の『觀念法門』の釋意によりて『大經』の意を述べしもの、順世間肉體的男女觀なり。されども信益現生を主張せるの意底を探れば精神的男女の義存せざるにはあらず、『本典』信卷に『涅槃經』を引て佛性を說き、如來回向の大信心は卽佛性なることをいふ。然れば佛性を知るは卽信心を獲得するをいふ、知性を男子とすれば、信心獲得の行者は男子といふべきを意味す、入正定聚の菩薩は女性的名稱にあらず、肉體的五障垢穢の女人も獲信すれば、卽時入正定聚の菩薩の德を具す、亦是變成男子といふべきなり。眞宗の古德泰通院義敎の說に『觀經』の下三品に往生の機を擧るに、若善男子善女人といひながら、其來迎を說くに至りては、

讚言善男子、汝稱佛名故、我來迎汝、

といふて女人をいはず、是旣に變成男子の德あるが故なりといふ、意味ある解釋といふべし。次に佛敎純理的男女觀とは男女の名はもと五蘊假和合の肉體より起

る所のものにして、亦是假名のみ、故に第一義諦より之をいへば、非男非女なり、『轉女身經』（縮藏字九ノ七十四丁）に

諸法悉如幻　但從分別生　於第一義中　無有男女相

といひ『維摩經』卷中觀衆生品に天女の散せし華の、舍利弗の頭に附着して取らんとすれども取れざるより始りて、天女と舍利弗の幾番の問答あり、其中に舍利弗の天女に向ひて何故に女身を轉せざるやと問へるに答へ、種々の神通變作を現することを說けり。其文の中に（縮藏黃七ノ二十三丁）

是故佛說一切諸法非男非女

といふも、亦是純理的男女觀を表示するものといふべし。淨土門にて淨土に往生せば變成男子の相を現ずといへども、其實は天親菩薩の『淨土論』に

大乘善根界　等無譏嫌名　女人及根缺　二乘種不生

といひ、曇鸞大師の『論註』に淨土には女人と根缺と二乘の三類の體も名もなしと釋せるより見れば、女人の體名ともに存せざるときは、之と相對せる男子といふ名も亦存せざるべきなり。然れば非男非女の男相を絕對の境とすべく、淨土皆男といふも因順餘方の名稱のみ。

第四章　眞宗の神祇觀

眞宗の神祇觀は聖人の『本典』化土卷、『現世利益和讃』、『述懷和讃』、『御消息集』、『嘆異鈔』に始りて、覺如上人の『御傳鈔』存覺上人の『諸神本懷集』、『破邪顯正鈔』蓮如上人の『御文章』等に散見す。聖人の敎義は一向專念を主張するが故に、彌陀佛以外の佛菩薩に向ひて尊敬の禮儀を失はぬことを敎ゆれども、未來に就て宗敎的祈念要求をなすを許さず、況んや佛敎以外の諸神をや、其尊敬を心がくるの意思は、諸佛諸菩薩は本師彌陀の佛意を領するが故に我等末佛末菩薩に向ひて本師の佛意を宣流したまうの恩を謝し、神祇に對しては本地垂迹の故を以て其本地の佛德を嘆じて其垂迹の本意を仰ぎ、和光同塵の攝化の恩を謝するにあり。然るに此一向專念の宗義を守り、諸神祇に向ひて祈念要求をなさゝるの眞意は、世人の爲に誤解せられ國神を輕侮するものなりとの非難を招くことあり、故に聖人以來の敎語に之が辨疏をつとめらるゝもの多し、『御消息集』に聖人より念佛の人々へ

贈られし文に（法卷第四卷十丁）

よろづの佛苦薩をかろしめまいらせ、よろづの神祇冥道をあなつりすてたてまつるとまうすこと、このことゆめ〳〵なきことなり、中略佛法をふかく信ずるひとをば天地におはしますよろづのかみはかげのかたちにそへるがごとくしてまもらせたまうことにてさふらへば、念佛を信ずる身にて天地のかみをすてまふさんとおもふことゆめ〳〵なきことなり、神祇等たにもすてられたまはずいかにいはんやよろづの佛菩薩をあたにもまふしをろかにおもひまいらせさふらふへしや

といひ『破邪顯正鈔』には神明をかろしめたてまつるよしの事と標して、

この條あとかたもなき虛誕なり、そのゆへは神明に於て權實の不同ありといへともおほくは諸佛菩薩の變化なり、衆生を利益せんかため群類を化度せんがためにかりに凡惑のちりにましはりて、しばらく分段のさかひに現したまへり、これすなはち佛法に於てさしたる善因をたくはへさる無依無怙のともから、信をいたしてわかまへにいたらばこれをもて來緣としてつゐに三界の火宅をいた

さしめてすみやかに一實の金剎にいたらしめんとなり、いま念佛の行者はふかくその垂迹の本意をしり、かの大悲の恩致をさとりて專心に往生をもとめ中略

その垂迹たらん神明したかひて、また隨喜をいたしたまふへし、

といふが如きは存覺上人の神祇輕視の世の非難に對し、本地垂迹の說を以て辨疏につとめしこと知るべし。此佛陀を本地と號し神明を垂迹と稱する說は、聖人の世に出づる以前より廣く世上に行はれ、神社には必ず神宮寺なるものを建て、本地垂迹並べて奉仕するといふありさまなりしを以て、世人の共鳴する佛本神迹の說を以て神祇輕視の非難を辨疏せしなり。聖人には國神と佛陀とを擧て本迹を說けるの言說なけれども、覺如上人の『聖人傳繪』所謂『御傳鈔』に聖人の平太郎に對せられし法話を載する文に、

證誠殿の本地すなはちいまの敎主なり、かるかゆへにとてもかくても、衆生に結緣のこころさしふかきによりて、和光の垂迹を留めたまふ、垂迹をとゝむる本意たゝ結緣の群類をして願海に引入せんとなり、

といへるより見れば、聖人亦此本地垂迹の說を以て神祇に對する一向專念の行者

の心地とせるなるべし。『本典』化卷末(三十丁)に『須彌四域經』の

應聲菩薩爲伏羲吉祥菩薩爲女媧也、

といへる文と、『空寂所問經』の

迦葉爲老子儒童爲孔子光淨爲顏回也、

といへる文を引き、又『和讃』に『觀經』の與逆聞法に關係せる十五人を列擧して、すべて權化利生の聖者とせる等より見れば、聖人の見地は彌陀佛を以て萬善萬德の總體根本と强信し、すべて世の中に世を益し人を利するの行爲をなせしものは、皆其萬善萬德中の部分的實現なりとせるものなるべし。本地垂迹の說此原理によりて聖人の依用する所となりしなり、此垂迹の靈神を祭れる祠宇を權社といひ邪神を祀れる姪祠を實社といふ、又聖人は佛法守護の神にして、念佛の行者に影隨するを善鬼神といひ、念佛の信者を避けて畏れ去るものを惡鬼神といへり。要は一向專念の宗義を押し立てるを眞宗の敎義とす。蓮如上人は御文章にしば〳〵神明をかろしむべからずと誡め、祈念追從を排斥し、南無阿彌陀佛の中にこもれる神明なれば、和光同塵の利生の恩を思ひてかろしむことなかれといへり。畢竟神

祇そのものは佛の部分的尊體と思ひ、之を敬するの意念は報恩を心がけ迷信邪念を以て神祇に向ふことを許さゝるを眞宗の敎義とす。

第十二編　結述

上來編を重ね章を逐ふて思ひ出るにまかせて眞宗教義の綱要を略述せり。然れども教義の研究は眞宗の要にはあらず、聖人の眞意は人をして彌陀佛の大悲に信順投托し、報恩念佛の生活をなさしめんと欲するにあり。大悲に信順投托するには自己の三業を捨離し、全然彌陀佛の願力に歸入せざるべからず、理窟も學問も研究も穿鑿もすべて自己三業に屬すべき所作なれば、往生に向ひては、直接にも間接にも何等の必要なし。故に聖人は聞法の爲に膝下に集れる人々に對して、

おの〳〵十餘箇國のさかひをこえて身命をかへりみすして、たつねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんかためなり、しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんとここころにくくおほしめして、おはしましてはんへらんはおほきなるあやまりなり、もししからは南都北嶺にもゆゝしき學生たちおほく座せられてさふらうなれば、かの人々にもあひたてまつりて往生の要よく〳〵きかるへきなり、親鸞におきてはたゝ念佛して彌陀にたすけられまいらすへしと、よき人のおほせをかうふりて信するほかに別の子細なきなり、念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんへらん、また地獄におつへき業にてやはんへるらん、總してもて存知せざるなり（『歎異鈔』第二章）

といへり。其信仰の無我に徹底せる、秋毫も自己を顧みざるの情狀言中に溢れたり。蓮如上人よく聖人の遺訓を奉し、無我の信仰に安住せり、故に『御一代聞書』に上人の語を載せて

聖教をよく覺えたりとも、他力の安心をしかと決定なくはいたつらことなり彌陀をたのむところにて、往生決定と信してふたこゝろなく臨終までとほりさふらはゝ往生すへきなり、

佛法は無我と仰せられ候、我と思ふことはいさゝかあるましきことなり、

聖教よみの聖教よますあり、聖教よまずの聖教よみあり（中略）聖教をばよめども眞實によみもせず、法義もなきは聖教よみの聖教よまずなり、

聖教よみの佛法を申たてたることはなく候、尼入道のたぐひのたふとやありが

たやと申され候をきゝては、人が信をとると前々往上人仰せられ候中略聖教をよめども、名聞がさきにたちて心には法なき故に、人の信用なきなり

と云へり。聖人の教義は學問研究を要とせざることしるべし。然るに聖人またまことにこのことはりにまよへらんひとはいかにも〳〵學問して本願のむねをしるべきなり、經釋をよみ學すといへども、聖教の本意をこゝろえざる條もとも不便のことなり、（『歎異鈔』第十二章）

といへり、此意によれば往生に向ふて學問の所要なけれども、彌陀の大悲を知るべき道程としては學問も研究も亦要なきにあらずといふ意なるべし。老衲の上來教義の概略を記したるも、往生一定の大安心に住し了れば、許多の閑文字は叩門の瓦子、指月の指のみ、たゞ門戸を開かんと思ひ、月の所在に心づかざる人のために叩くべき瓦子も、指さす指も必要なるべきのみ、未だ眞宗を知らずしてそれを知らんと思ふ人々のために、參考の一助ともならば、老衲の最もよろこぶ所なり、又往生一定の安心に住せられし人は、研究亦教人信の報恩行宣傳大悲の一助ともならん。老衲も亦其人々と共に經釋の義趣を味ひつゝ、彌陀佛の大悲を讃仰して、生死一貫の他力の大道を聯歩せんこと冀望にたへず。南無阿彌陀佛

眞宗綱要畢

大正十一年五月十四日印刷
大正十一年五月十八日發行

（定價二圓）

著作者　鈴木法琛

發行者　東京市小石川區原町六番地
高島米峰

印刷者　東京市麹町區三崎町三丁目一番地
百目木智璉

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地
株式會社共榮舍

發行所　東京市小石川區原町六
振替東京一五六八六
電話小石川一二八八
丙午出版社

1/
563

寺四六無師 齋藤唯信先生著
眞宗の信仰と教義 定價十二錢 四錢

文學博士 前田慧雲先生著
三論宗綱要 定價十二錢 四錢

大僧正 權田雷斧師著
密教綱要 定價一圓五十錢 八錢

文學博士 前田慧雲先生著
天台宗綱要 定價十三錢 二錢

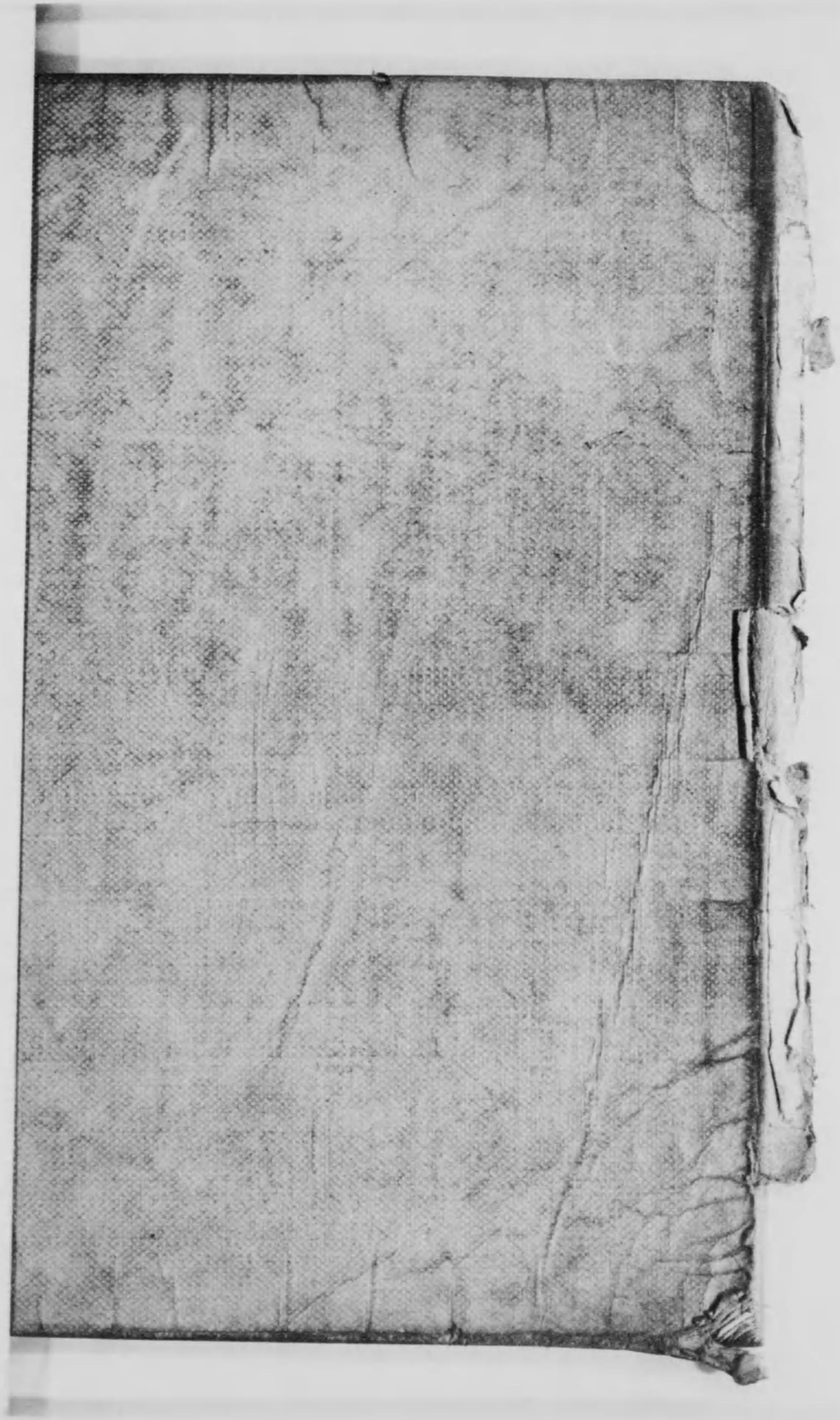
竹園學大學長 秋野孝道師著
禪宗綱要 定價二圓八十錢 五錢

帝國大學講師 藤島唯信先生著
華嚴學綱要 定價二圓五十錢 八錢

文學博士 松本文三郎先生著
印度の佛教 定價一圓八十錢 五錢

高等師範博士 木村博士共著
印度哲學宗教史 定價十四錢 二錢

文學博士 木村泰賢先生著
印度六派哲學 定價十五錢 八錢

文學博士 木村泰賢先生著
原始佛教思想論 定價十四錢 八錢

終